



■	目次	■
説教	主の日を守る	…… 北村 一幸 …… 1
現代の神学者紹介		
	第五回 カール・バルト2	…… 小林 宏和 …… 2
旧約聖書に聴く「十戒とは何か」(4)		…… 三好 明 …… 3
	第三戒	
教会、この地とともに②	郡山伝道所	
	日本史の中の郡山とキリスト教	…… 片野安久利 …… 4
次世代へのメッセージ⑦		
	教会経験の断章 共有を願って	…… 堀 一善 …… 5
こいのにあ	南柏教会牧師就職式	…… 山崎 和子 …… 6
	多摩地域教会建設式報告	…… 大石 周平 …… 6
	西経堂伝道所牧師就職式	…… 近藤 徹也 …… 7
	福井宝永教会牧師就職式	…… 岡本 靖子 …… 7
	新宮教会牧師就職式	…… 大川 治 …… 8
教会ニュース		…… 8



主の日を守る

人の子は安息日の主なのである。

(マタイによる福音書12章1～8節)

きた むら かず ゆき
北 村 一 幸

教会は、コロナ禍でも可能な限り礼拝を遵守する姿勢を続けています。日曜日毎の礼拝に関し、近所の方に、また友人や知人によく言われますのは「大変ですね」という言葉です。それには、二つの意味があります。「熱心で感心します」の賛辞の意味と、「クリスチャンは日曜日なのにお勤めとはいえ感心なことですね」との呆れられた視線です。

「人間は屢々、神よりも宗教的になる」という不思議な言葉があります。戒めを忠実に守ろうとすることによって熱心で忠実な信仰者であると判断される一面と、戒律遵守を実行する宗教者であろうとすることで、神よりも宗教的であるということなのでしょう。しかし、信仰は戒めを強要されることなのでしょう。信仰とは自由となることではないのでしょうか。罪赦されてとは罪と死の縄目から解放され、自由の中に生き得るということではないのでしょうか。私たちは日曜日、主の日の礼拝に招かれ、罪赦され、希望と力を与えられる恵みに浴しています。

1節に、「そのころ、ある安息日にイエスは麦畑を通られた。弟子たちは空腹になったので、麦の穂を摘んで食べ始めた」とあります。ファリサイ派の人々がこれを見て、イエスに「御覧なさい。あなたの弟子たちは、安息日にはしてはならないことをしている」と言います。そこで、イエスは、旧約聖書の出来事を引いて「ダビデが自分も供の者たちも空腹だったときに何をしたか…神の家に入り、ただ祭司のほかには、自分も供の者たちも食べてはならない供えのパンを食べたではないか」(3節)と言われたのです。あの尊敬を集めるダビデ王と従者に起

こった出来事は、律法への杓子定規の行動ではなく、王なるダビデに赦される事柄として処置されたのです。ましてここ、弟子たちとイエスとの旅程で起こった事柄は、ダビデの末裔でもあるイエスゆえの対処なのです。「わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない」との言葉、これは、旧約時代の律法、祭儀の方法「いけにえ」ではなく、イエス到来により始まった新約時代の福音、礼拝の精神「憐れみ・愛」の大切さを述べていることです。「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためであるのではない」(マルコ2章27節)とのイエスの言葉のとおりなのです。

教会以外の近隣の人々に「礼拝、大変ですね」と思われるのは、日曜日、教会では「主の日」と言いますが、その日の過ごし方の理解が、その方々に及んでいないからでしょう。日本においては、日曜日が休み、という習慣だけは西洋の文化と共に入り、定着したのでしょうか。

ところで、イエスは十字架上で死なれましたが甦られます。死に打ち勝ち、復活の希望となってからは、人々は主が甦られた日曜日の朝、週の初めの日に集まるようになりました。現在、教会では主の日、「主日(しゅじつ)」として礼拝を守り続けていますが、この日、私たちは永遠の生命に生きる者としてくださる主を仰ぎ、礼拝を捧げ、み言葉に聞き、主に栄光を帰しまつる働きに加わっているのです。

神の御子、イエス・キリストを「救い主」と信じ、礼拝し続けるため、主が甦られた主の日を大事にし、喜び守っていききたいものです。(旭川教会牧師)